

次の文章は、ある本の「序」である。これを読み、後の設問に答えよ。

ヨーロッパの美に近づいて行くについて、私は、自分で考えてみて、ヨーロッパの正統とされるものに比べてはいかにも異端的な道をたどったものだと思う。元来、ヴァレリーの言うヨーロッパ、それを構成する三つの支柱、すなわら、ギリシャ、キリスト教、科学精神といったものの、このどれ一つをとって見ても、なみの日本人としての生活感情を生まなままで、それをもったまままで近づいて行って、ごく自然にこの三つのもの、どれ一つとして自然にわれわれのなかへ入って来てくれるというものではない、と思われるのである。ギリシャ、キリスト教、科学精神——これらのものに近づくについては、われわれとしては、われわれの内なる自然なものうちの、何か一つを、またはいくつかのものを殺してかかるか、またはどこかへ押しこめたり目をつぶったりしてかからなければならぬ、と思う。

正直に言って、誰しも何らかの無理をしなければならぬのである。つまり、勉強、ということがどうしてもなう。そうして、この「無理と努力の報酬としての感動がある」というかたちになっていることが大部分の例であろうと思われる。もし仕合せにも、正統に、感動が先立ってくれたとしても、その後の始末には、どうしても勉強ということがともなわざるをえないであろう。精神のどの部分かをねじ曲げ、あるいはねじ曲げられることが感動である、といった例さえ稀ではない筈である。そのことをよいかかわるいとこと言っているのではない。非西欧地域の西欧観、あるいは近代化というものにもなう、それは避けて通ることの出来なかつた道なのであつた。

その逆もまた真である。私の知人の、モスクワのある女性は、英仏語は公式の通訳をつとめるほどにジュークタツしてい、しかも専門はインド文学で、ヒンディ語及びペルシャ系のウルドゥ語にも精通しているひとであるが、この専門家も、インド音楽にだけは、どうしても我慢が出来ない、と私に告白したことがあつた。ということ、キリスト教の寺院建築に典型的にあらわれている、あの中心へ向う意志というものがない、つまり中心志向の構造をもたなくて、寺院建築同様の構造をもつ西洋古典音楽との対比の上でこれを言えば、いわば無限に連続し持続し、かっちりとした開始点と終止点をもたないかに思われる東方の音楽が、彼女にはどうにもなじめないわけである。またスペインのフラメンコ音楽がどうにも不愉快でならぬというスイスの娘も私は知っている。

イ私としてはそういう彼女らに、半分がたは同感し、同情できるように思つた。ここで半分がたは、という曖昧なことばを使ったのは、こういうことは量であらわすことのできないことであり、幼時を墨絵や書を眺め、琴や三味線などの東方の音楽のなかで育ち、その後は西方のそれを見、聴いてすごして来た自分というものの姿が、彼女らとの会話の間にゲンゼンして来ていた、と感じたからである。

だからここで、柄にもないということばを絵に描いたような、まったく柄にもない美術についての私的な感想を書いて行くについて、私の努力は、なるべく努力をしない、勉強をしない、ということに注がれることになる。それがどこまで出来ることであるかは私にもわからないが、異質の美に接して、無理と努力、勉強をできるだけしないで、出来るだけ、最大限に自分の自然を保って見て行きたいと思う。いかなる巨匠の、いかなる圧倒的なケツサクと世に称されるものであろうとも、それが自分の自然にとつてコッケイと思われたら、それをコッケイと言う自然を保って行きたいし、つもりとしてはそうして来たつもりでもあつた。ヨーロッパの正統だけが、ヨーロッパを視るについての正統である筈がないからである。むかし歌舞伎の羽左衛門がヨーロッパへ行って「なんだ、どれもこれもみな耶蘇じゃねえか……」と言つたという、ウソという心持を私としても保って行きたい。

〔注〕羽左衛門 十五世市村羽左衛門。歌舞伎俳優。明治七年（一八七四）～昭和二十年（一九四五）。

設問

（1）「無理と努力の報酬としヴ、の感黎ある、というかたちになっている」（傍線部ア）とあるが、なぜそうなるのか、わかりやすく説明せよ。

解答欄13. 7cm×2行

（2）「私としてはそういう彼女らに、半分がたは同感し、同情できるように思った」（傍線部イ）とあるが、「彼女ら」は「私」にとってどういう意味をもつ存在か、わかりやすく説明せよ。

解答欄13. 7cm×3行

（3）「そういう心持」（傍線部ウ）とは、どういうことか、説明せよ。

解答欄13. 7cm×2行

傍線部a・b・c・dのカタカナに相当する漢字を楷書でしるせ。

aジユクタツbゲンゼンcケッサクdコッケイ

◎堀田善衛『美しきもの見し人は』（序）